

先哲安心法語集

○大瀛和上

■能救所救 (『金剛鉾』先心書房 p50)

「次にその理を斥せば、『仏已に大悲回向心を以て向いたまう。故に衆生も亦必ず欲生心をもつて向うべし』とは。この理倒せり。

仏は、能救・能施、衆生は、所救・所施。一は有力、一は無力なり。

故に仏は願力回向を以て衆生に向うべし。衆生は唯、彼の願力に信託すべきのみ。何ぞ自らの願力をたのみて仏に向うべきや。」

■一念覚知を破す (『金剛鉾』先心書房 p201)

「真宗の肝要、ただこのタノム一念なる故に、若しこれ無き者は真宗の徒に非ず。然りと雖も、これに就いて記憶・不記憶を論ずることは、無理、無文、無益。

云何が無理。夫れタノムとは他力信心なり。その正不を督んと欲せば、宜しく現前の心相云何と問うべし。如何ぞその過去に就いて、記憶・不記憶を論ずるの理あらん。何ぞ執者、一度の作業に同ぜんや。：

執者は、過去一度の自力造作をもつて、帰命を修し終えんと計す。自力の一念は水に画くが如くなれば、往生の大事は極めて不安心なり。故にその一念の時を記憶するほどに無くては、たしかならずと思ひ、記憶が不分明であれば、たのみなおし、また人に向けても専らこの記憶を責む。

その正不を正さんとすれ、宜しく現前の心相云何と問うべし。何ぞその過去に就いて、記憶・不記憶を論ずるの理あらん。真宗の肝要、ただこのタノム一念なる故に、若しこれ無き者は真宗の徒に非ず。然りと雖も、これに就いて記憶・不記憶を論ずることは、無理、無文、無益。

正義は、他力信心決定の初念を、タノム一念と名づくるゆえに、此の一念臨終まで通る。いのちをかぎり、常に自ら現前して少しも改むことなし。何ぞ記・不記の論を容んや。故にいくたびも、ただ現前の信相に就いて、如実・不如実を正すのみ。」

■タスケタマへは凡夫の帰伏 (『金剛鉾』先心書房 p321)

「從來願力を疑ひ拒みて受けざりし自力の腕を止めて、タスケタマへと願命に帰伏したるに非ずや。」

○法霖和上

■箱と蓋 (『真宗名師安心語録』藤並天香 p16)

「衆生の機は箱の如く、如来の本願は蓋の如し。われらの根機の箱を考えたものに、瞋恚の角あり、貪欲のぎざあり、故に本願の蓋もそれに合うように思案したまえり。」

■手の尽きたところを他力という (『真宗名師安心語録』藤並天香 p17)

「凡夫の方より、みじん程の料簡を持ちいず、手の尽きたところを他力という。」

○善護和上

■心が定まれば、往生定まる、これ規矩なり (『安心法語問書』p9)

「其往生定まりた相とは即ち宝章に、『信心定まりぬれば浄土の往生は疑ひなく思うて喜ぶ心なり』と、又曰く『如来をたのむころのねてもさめても憶念の心つねにして忘れざるを本願たのむ決定心を得たる信心の行人とは云ふなり』と、是が規矩なり。斯る御教示にあはざれば往生は叶ふべからず」

※決定心

「決定心をすなはち深心となづく。その信心を具しぬれば、決定して往生するなり。」(西方指南鈔下本)

「決定の心をこらぬ人は。往生不定の人なるべし」(和語灯)

■機を責めず、法を眺めよ (『安心法語問書』p13)

「機功を責めずに、法体の阿弥陀仏を眺むれば、決信起こる」

■疑になりたいなりたいたと疑を払う (『真宗先德法語』竹田順道 p92)

「疑起るに付ていつか之を晴さばやと思ふ、只疑になりたいなりたいたと其疑ひに手を入れて払はんとするは闇より闇路に趣く大なる惑と云ふべし」

■壊れる信心は自力(『真宗先徳法語』竹田順道 p39)

「世には信心が壊れたとか壊されたとか云ふが、是皆自力の信なればなり」

○一蓮院秀存師

■仰せだけで安心せよ(『真宗先徳法語』竹田順道 p76)

「仰せだけで安心せよ。仰せを聞いて、それを我機へ戻して安心しようと思ふのは、深く弥陀をたのんだのではない。」

■お助けを見ることはいらぬ(『一蓮院談合録』p86)

「或人云。助けらるるものは。助ける人の姿を見る事も。助ける人がどうして助けて下さらうと。そんな詮議はいらぬ。又どれが助けられた姿ぢやとお助けを見ることもいらぬ。私は助けてやらうの声をきいて安心するだけのことぢや。」

■六字は二つに分る、三つには分らぬ(『秀存語録』p7)

「六字は二つに分る、三つには分らぬ。一とは衆生の機と阿弥陀仏の法となり。この仏と衆生との間に信を一つ入れて、実か虚かを分別すれば六かしくなる。中に信を一つ入ると六字が二つではなうて、機と信と法との三なり。それはあやまりなり。」

■助け上手(『秀存語録』p41)

「信じやうは下手でも、助けて下さる方が上手也。」

■如来は先手(『秀存語録』p192)

「碁を囲むに、先手後手の違ひにて勝負あり。先手をゆけば勝ち也。如来は先手にして、我等は後手也。」

■幾度きいても飽く事なし(『秀存語録』p58)

「満つれば欠くる習ひ也。そのなかに漏れたるものは、万行円満の嘉号也。」

何事も 多きには飽く ならひにも
もれたるものは 山桜花

凡夫が此俣仏になる事ばかりは、幾度きいても飽く事なし」

■合点くちずさみ(『秀存語録』120-121)

「合点ゆかずば ゆくまでききやれ きかば合点のゆく御慈悲
合点せいとは 口ではいへど 不思議不思議の外はない」

■負けることに骨を折れ(『一蓮院談合録』p46)

「師曰、新次郎、是からはまける事に骨を折るだぞや。」

○僧鎔和上

■負けて本願に帰す(『真宗名師安心語録』藤並天香 p24)

「負けて本願に帰するなり」

■親子の自然(『真宗名師安心語録』藤並天香 p24)

「親の家産、まったく子のものになりて他人争うことなきは、父子の天然なり。弥陀仏の功德、即ち行者のものなるは、願力自然のいわれあるが故なり」

○履善和上

■砂をにぎりたるが如し(『安心領解鈔』履善和上 p80)

「凡夫の心は沙を握るが如し、堅めんとしも堅まらず其の堅まらぬ、心を堅めたるやうに思て居るは、堅まらぬ沙を暫く手にて握つて居る間だ、散らずに居るやうなものなり。」

○七里恒順和上

■聞即信(『七里和上言行録』p141)

「和上曰く、聞いた俚が聞即信と云ふて信心になるのぢや。別に考へ出すことはない。きいたままでよい。」

○鮮妙和上

■一念帰命で足るを、二念帰命する（『安心法義問答』雲山和上 p162）

「兎角お同行さんが一念帰命で事の足ることを、二念帰命に為したがるは、お同行さんの癖である」

○蓮谷和上

■聴聞が余つて居る（『安心法義問答』雲山和上 p161）

「私は聴聞不足である故に罪惡生死のままを救ひ給ふの本願とは仰せらるけれども、その仰せの通りが受けられませぬと、申した所が、蓮谷和上は、それは同行聴聞不足ではない、聴聞が余つて居るのである。」

どの御言葉から聴聞しても、罪惡の凡夫をそのまま救ふぞよの仰せの外はない、それに同行は罪惡が在るゆえ往けまいと思ひなさるのが、それだけがあなたの加へた余れる分である。その加へた余つた分を取り除けて見れば、この罪惡のままをお助けと受くるより外はない。

依てあなたは聴聞が足りないのではなく、聴聞が余りてあるのであると申された」

○前田慧雲和上

■六字は助けるぞの外は意味はない（『真宗名師安心語録』藤並天香 p24）

「南無阿弥陀仏とは「助けるぞよ」の外には何の意味もない」

○雲山龍珠和上

■機の丈夫は法の丈夫（『安心法義問答』雲山和上 p49）

「御当流の御安心は、法の丈夫なのがそのまま吾が機にうつつて決定安堵の思になるのである。法の丈夫な外に別に機が丈夫になるといふものではない」

■領解たのみに領解なし（『安心法義問答』雲山和上 p108）

「領解して領解なきこそ領解なり、領解たのみに領解なし」

■一定と思えば一定す

（浄土真宗名法話講話選集六『安心決定鈔法話』p105）

「和語灯の「不定と思えばやがて不定なり、一定と思えば、一定する」とは、自心より往生を思い定むる自力心に似ておるようですが、これは我らが往生する仏の摂取決定によるので、その決定摂取のゆえに往生もまた決定となるのであります。法のごとく往生一定と思うものは一定となる。かかる往生一定の法をききながら不定と思うものは不定となる」

■負けて本願に帰す（『よすみ法語』利井興弘 p41）

「当流の信心は、我が惡業と角力をとつて勝つことではない。仏智と角力をとつて負けることじゃ。我が胸の中の土俵で善惡と角力をとつてはならぬ。仏の大願業力と角力をとれば、必ず負ける。負けてしあわせをするのである。」

■助け上手と助かり下手（『妙好人のいづば』梯和上 p262）

「政次郎といったのう。お前は聞き上手か、聞き下手か。助かり上手か、助かり下手か」

「もう聞き下手の、助かり下手でござります」

「阿弥陀さまは、助け上手か、助け下手か」

「それはもう助け上手でござります」

「それで合点がいったらう。誰でもなおす病氣をなおしたとて、名医というものではない。ひとがなおせぬ病氣をなおすでこそ、あれは上手な医者というのじゃ。聞きべたで、助かりべたのわしやお前を、たすけてくださるでいそ、阿弥陀さまは、お助け上手な仏さまと、諸仏もたたえなされるのであらう。」

■わかつただけ喜ぶ（『利井鮮妙和上訓話集』p19）

「法の広大さが分りただけ喜びなきこ」

■左文字右文字（鮮妙和上『專精法語 0 text』）

「左文字おせば右文字助くるの外に助かるころやはある」

■浄土真向き宗（鮮妙和上『專精語録 1 text』 No39）

「浄土真宗とは、浄土真向きの宗と云うこと」。

喩えば月を後ろにしたなれば足元は我影で暗いが、月に向うて往けば足元は明い。是と同じで、本願成就の真実報土に真向きになれば、煩惱の影は背になりて領解の足元は明い。」

■願と誓（鮮妙和上『專精語録 1 text』 No54）

「願とはねがいどうあつても此様にせねばおかぬと云う希望で、誓とは条約を立てかけ事をするのである。」

薬師如来は十二の大願がありまして、一切衆生を一人も残さず薬師如来と同様の身の上にせねばおかぬ等、此世後世の御利益を十二通りにお願なされてある。此十二の中に病をなおし或は女を転じて男にならしむる等の本願もあれど、願あつて誓がない。

又観音様は薬師如来と違つて願の上に誓いがある。弘猛海慧經に三度我名を称えたらば、病も除こう成仏もさそう。もし出来ずば、正覚とらじと正覚をかけものにし抵当を入れてお願いされてあるが、未だ仏になり玉わぬゆえ助けることが出来ぬ。

今阿弥陀仏は衆生を仏にせずば置かぬの本願を立てて、其上に我も正覚をとらじとかけもの抵当入れての御誓い、而も其誓願が既に成就した相が今の南無阿弥陀仏であります。御誓いあるゆえ薬師如来の誓なしの本願とは違つ。其御誓のある本願が御成就ゆえ観音様の未だ仏になり玉わぬ誓いとは違つ。御誓ある本願御成就ゆえ衆生の仏になることは露塵も間違いない。」

※西方指南抄下末

「薬師の十二の誓願には、不取正覚の願なく、千手の願また不取正覚とちかひたまへるも、いまだ正覚なりたまはず。弥陀は不取正覚の願をおこして、しかも正覚なりて、すでに十劫をへたまへり。」

○高松悟峰和上

■まことと私のもの（『真宗安心語録』 竹田順道 p138）

「聞きやうのかなめ二つあり、如来の正覚が我等が往生の外なければ、一つは如来の御誠、二つには私のもの。手強い本願が我れのものぢやと聞えた時、かかるもの御助けに預かることよと、如実の御呼声のままを心得させて貰う、之が当流の御領解の姿であります。」

○旭確方和上

■医者に行くのは病氣を持った其俣（『真宗安心語録』 竹田順道 p82）

「医者に行くのは病氣を持った其俣ぢや。治す手際は医者にある。地獄真向の此俣ぢや、助くる手際は弥陀にある。御互に御慈悲と相撲は駄目ぢやぞ。」

■機はまる任せ、法はまる助け（『真宗安心語録』 竹田順道 p83）

「南無の二字はまる任せ、阿弥陀仏の四字は、まる助け。まる任せの南無の信は、まる助けの阿弥陀仏より起る。」

■不安の心を以て安心しようと思ふな（『真宗安心語録』 竹田順道 p85）

「不安の心を以て安心しようと思ふは、借金を以て借金を払はんとするが如し。」

○換言和上

■タスケタマウナと領解したいか（『真宗安心語録』 竹田順道 p27-28）

「私はたすけ給へとのめば、一寸意業になりさうで、此処が気がかりで御座います」と申しあげし処。答。「そんならお前の御領解は、たすけたまふな、と申したいか。夫では御呼声に対して御断りを申すことになりはせぬか」

○村田静照師

■このまんま行きます（『無門関提唱』 朝比奈宗源 p315）

「ある時私が、「和上はお浄土へ行かれる時は、どんななりをして行かれまするか」とうかがうと、木綿着物に絆天かなにか着ていられたが、自分の姿をぐりつと見巡して、「このまんまですなあ」と。」